
サンスクリット語文法ノート (4)

ヴェーダ語 valh- 「謎を掛ける」と ギリシア語 elephaíromai について

松浦 高志

1 はじめに

後藤「brahmodya」482 n. 4 では、ヴェーダ語 valh- 「謎を掛ける、謎によって挑む」とギリシア語 elephaíromai はともに *uelh₁b^h-r-je- に由来すると考えて、次の二つのことが主張されている¹。

- (1) ギリシア語の elephaíromai は「謎によって相手を混乱させる、欺く」と理解される。
- (2) ギリシア語に現れる固有名詞は、戦や紛争の際に相手に謎かけをする、知的な戦士のいたことを推定させる。

Gotō, „ἐλεφαίρομαι“ ではギリシア語の elephaíromai について詳しく検討されているので、それに基づいてこれら二つを検討する。

¹ 本ノートは後藤「brahmodya」と Gotō, „ἐλεφαίρομαι“ の内容を説明することを目的に、2016年5月30日の梶原三恵子先生の「印度語学印度文学演習(3)」(東京大学文学部)で発表した際の発表資料にもとづくものである。注18にあるように、後藤自身は線文字B粘土板にある e-re-pa-i-ro 「エレパ(イ)ローン(?)」が valh- とギリシア語 elephaíromai と同じ語源をもつという考え方は留保しているようであるが、それ以外の議論は大変興味深いので、そのまま掲載した。なお、本ブックレットへの掲載に当たってはミュケーナイ文明期ギリシア語に関する文献等に若干加筆を行った。加筆に際してはJSPS 科研費 JP22K20016 の助成を受けた。

2 elephaíromai の表す意味

elephaíromai の用例は三例で、初期叙事詩(ホメーロスやヘーシオドス、「ホメーロス風讃歌」など、おおむね紀元前 8–6 世紀に作られた叙事詩)でのみ用いられている。以下で一つずつ意味を検討する。二つはホメーロス(希 Hómēros, 紀元前 8 世紀頃)で、一つはヘーシオドス(希 Hēsíodos, 紀元前 8–7 世紀)である。ヘーシュキオス(希 Hēsýkhios, 初期叙事詩などで用いられている難語を説明するための辞典を紀元後 5 世紀頃に編纂した人物)は elephaíromai を「欺く, 傷つける, 不正をはたらく」と解釈している。前述の三つの用例はいずれも中動態であるが、ヘーシュキオスはさらに別の項目で能動態アオリスト不定詞(elephērai)とその意味「欺く」も与えている(ただし辞典にあるだけで実際の用例は存在しない)²。ただし第 6 節で挙げる, 同根と思われる名詞や形容詞も含め, 古い時代の文献中で, 主に叙事詩の表現としてごくわずかの用例が認められるだけであり, いずれも意味は一定せず, どのように語が形成されているかもはっきりしてはいないので, 簡単に語源やそれらの表す意味を導き出すことは

² ヘーシュキオスをはじめとする各種の(難語)辞典は, 編纂された時期は遅いが, ヘレニズム時代(紀元前 3–1 世紀)の, 主にアレクサンドレイア(エジプト)での文献学研究に起源を求めることができる。この時期のアレクサンドレイアには, その後失われてしまったものも含め多くのギリシア語文献が集められ, 研究されていた。そのため, その時代に編纂された辞典の内容を引き継いでいる可能性があり, その中に現在失われてしまった作品等で用いられていた単語が収められている可能性がある。しかしこの例と同様, 出典が挙げられていることはきわめて稀である。したがってある箇所では古い時代の信頼できる研究から引用しているが, またある箇所では単に後代の学者が自分の解釈を提示しているだけということが起こり得る。したがってこれらの辞典に載っている意味を受け入れる際には十分な注意が必要なのは言うまでもない。

難しい³.

3 「欺く」(1)

次の箇所は、*elephaíromai* の意味に「欺く」があるということを明確に示している⁴.

「客人よ、夢というものは把え難く、その意味を判ずるのは難しいもの、また人間には夢で見たことがすべてその通りになるわけでもありません。朦朧^{もうろう}として実体のない夢の通う門は二つあって、その一つは角^{つの}で、もう一つは象牙で造られています。人の見る夢のうち、挽き切られた象牙の門を出て来たものは、実現せぬ言葉を伝えて人を欺きますが、磨かれた角の門を潜って出る夢は、それを見た人に見た通り実現してくれます。」

(ホメーロス『オデュッセイア』第19巻
第560–567行 [松平訳, 太字引用者])

elephaíromai は、ここでは直説法中動態現在 3 人称複数に活用している (*elephaírontai*)。これは通俗語源解釈と思われる。おそらく「角」(希 *kéras*) と「実現させる」(希 *krainō*) を、また「象牙」(希 *eléphās*) と「欺く、害する」(希 *elephaíromai*) とを関連付けて説明している⁵。

4 「欺く」(2)

次はアキッレウスの要望により、親友パトロクロスの葬礼競技が行われ

³ Beekes, *Dictionary*, s.v. ἐλεφαίρομαι.

⁴ Gotō, „ἐλεφαίρομαι“, 365–366.

⁵ 松平『オデュッセイア』下巻, p. 201, l. 9 に対する訳注 (p. 340) .

る場面である。ここでも *elephaíromai* は似た意味で用いられている⁶。

(ディオメデスの)馬は鞭なしで走るため足の進みも思うにまかせぬ。だが、アポロンがテュデウスの子(ディオメデス)をたばかったことに、アテネが気づかぬ筈はなく、たちまち軍勢の牧者(ディオメデス)に駆け寄ると、鞭を手渡し、馬に力を吹き込んだ。

(ホメーロス『イーリアス』第23巻
第387-390行 [松平訳, 太字引用者])

この場面は五人による戦車競走で、折り返し地点を過ぎて先頭がエウメーロス、その次がディオメーデースでその差はわずか、という状況である。エウメーロスの馬はアポッローン自らが育てたものであるため、彼はディオメーデースの鞭をはたき落とす(第383行)。 *elephaíromai* は、ここでは中動態アオリスト分詞となって (*elephērámenos*) アポッローンに係っている。

5 「滅ぼす」

以上の二例とは異なった意味で用いられているのが、次の箇所である⁷。

だが女怪はまた テバイ人らの破滅の^{もと}因 忌まわしいピックスを生
んだ。

オルトスの愛をうけて、またネメアの獅子を生んだが
この獅子を ゼウスの栄えある妃ヘラが育みたまい

⁶ Gotō, „ἐλεφαίρομαι“, 366.

⁷ Gotō, „ἐλεφαίρομαι“, 366.

人間どもにとっての災厄として ネメアの山峽^{かい}に住まわせられたのだ。

この獅子はここに棲みついて 人間どもの族を喰い殺し
ネメアのトレトスとアペサスの山を支配した。

だが これを力強いヘラクレスその人が撃ち殪した。

(ヘーシオドス『神統記』第 326–332 行 [廣川訳, 太字引用者])

「喰い殺し」が *elephaíromai* に対応するが、これは獅子が人間を食っていたことを考慮した意識であり、一般には「滅ぼす」と解釈される。ここでは *elephaíromai* は加音 (augment) を付さない (未完了) 過去 (imperfect) 3 人称単数に活用している (*elephaíreto*)。「女怪」と呼ばれているのはエキドナのことであり、「ピックス」はスピックス (希 *Sphínx*) のボイオーティアー方言形である⁸。

スピックスはボイオーティアーの町テーバイの西にある山に陣取り、謎をかけて解けない者を取って食べた。ヘーシオドスではスピックスとネメアーのライオンが兄弟とされていることから、後藤はネメアーのライオンがスピックスと同様に謎をかけて解けない者を取って食べた可能性があると論じ、ヘーシオドスがここで *elephaíromai* を使っているのはそれを反映していると主張している。ただしネメアーのライオンが謎かけをしていたという神話は残っていない⁹。

6 同根と思われる名詞と語源

⁸ エキドナについては高津『辞典』エキドナの項 (pp. 67–68) , スピックスについては高津『辞典』スピックスの項 (p. 139) を見よ。

⁹ ネメアーの獅子については高津『辞典』ヘーラクレースの項の「IV. 十二功業の 1」 (p. 237) を見よ。

elephaíromai と関係のある可能性のある名詞としては形容詞 oloph-ōios 「欺く, 滅ぼす」, 固有名詞 Eleph-énōr 「エレペーノール」, ミュケーナイ文明期ギリシア語 (ミュケーナイ・ギリシア語) の e-re-pa-i-ro (固有名詞?) がある¹⁰.

olophōios は叙事詩の中のみで使われる. ホメーロスでは『オデュッセイア』の中だけで使われ, ヘーシオドスには用例がない. 「キルケの恐るべき企み」(ホメーロス『オデュッセイア』第10巻第289行 [松平訳, 太字引用者]) では, キルケが飲み物に毒を混ぜることが olophōios と言われているから, elephaíromai と同様に「欺く」という意味が想定される. 「翁の悪賢いやり方」(ホメーロス『オデュッセイア』第4巻第410行 [松平訳, 太字引用者]) では彼を捕えようとする人間から逃れようと姿を変える海神ポセイドーンの従者プロテウスの行動が olophōios と述べられている. 『オデュッセイア』第4巻第460行ではプロテウス自身が olophōios と言われている. 一方, 紀元前3世紀の叙事詩では「滅ぼす」の意味で用いられる¹¹.

また, 後藤は将軍の名前 Eleph-énōr 「エレペーノール」を「[謎によって] 困惑させる人」と語源解釈を行っている¹².

後藤「brahmodya」482 n. 4 で言及されているミュケーナイ文書 (Mykhēnai とあるのは Mykēnai の誤りである) 以来見られる固有名詞とは e-re-pa-i-ro /Eleph^hairōn(?) / (KN Vc 212) である¹³. これはクレータ島のクノーッソス (KN,

¹⁰ ミュケーナイ文明期ギリシア語を記すのに用いられた線文字 B は r と l を区別しない.

¹¹ S. West は Heubeck, West, and Hainsworth (eds), *Commentary*, p. 220 で, ホメーロスより後の叙事詩人は olophōios を óllymi 「滅ぼす」と関連づけていると述べている.

¹² Gotō, „ἐλεφαίρομαι“, 369.

¹³ Aura Jorro (red.), *Diccionario*, s.v.

今のイラクリオンの近く) で出土した表意文字を使用しない目録 (Vc) の一つである¹⁴。ただし文脈は不明である。また別の粘土板に記された e-re-pa-ro (KN Ce 144) は e-re-pa-i-ro の別表記の可能性はある¹⁵。この KN Ce 144 は KN Vc 212 は同じ書き手によるものであり、同じ場所から出土しているので関係があると考えられている¹⁶。以下に本文と翻訳を挙げる¹⁷。

行 原文	翻訳
.0
.1 e-re-pa-ro BOS ZE [エレパ (イ) ローン (?) は軛にかけた牛を [
.2 a-pa-ta-wa [アプタルワにおいて (?) [
.3

(KN Ce 144)

ただしミュケーナイ文明期ギリシア語 (おおよそ紀元前 15–12 世紀) では語頭・語中のいずれでも /w/ は消失していなかったもので、もしこれが印欧祖語 *uelh^h- に由来するならば、これは *we-re-pa-i-ro /welep^hairōn/ になるはずであるから¹⁸、ヴェーダ語の valh- との関係を考えることはできな

¹⁴ 記号の表す意味については Bartoněk, *Handbuch*, 85–94 や Hooker, *Introduction*, 36–37 を見るとよい。

¹⁵ Aura Jorro (red.), *Diccionario*, s.v. 最後の音節文字の -ro の読みは不確実であるとしていた (e-re-pa-ro) が, Aura Jorro et al., *Suplemento*, s.v. では確実である (e-re-pa-ro) とされている。

¹⁶ Enegren, ‘Animals’, 14.

¹⁷ <https://www2.hf.uio.no/damos/Words/> で本文を読むことができる。本文中に出てくるアプタルワは、現代名ではアプテラ (希 *Áptera*) で、クレータ島西部の主要都市ハニア (希 *Khaniá*) の近くの町である。

¹⁸ Beekes, *Dictionary*, s.v. ἐλεφαίρομαι. Gotō, „ἐλεφαίρομαι“, 370 に対する彼自身の

い。もちろんホメーロスやヘーシオドスの作品においては語頭・語中のいずれでも /w/ は消失しているので、*welephaíromai となっていなくても問題はない。ただしその場合 e-re-pa-(i)-ro には別の語源を考えなければならず、新たな説明が必要になる。

Gotō, „ἐλεφαίρομαι“, 368 では elephaíromai の語源とその意味について次のように想定されている。

- (1) 語根 *uelh₁b^h- はもともと「困惑させる，悩ませる」を意味し，特に「謎によって困惑させる，悩ませる」の意味をもった。
- (2) *uélb^h-r- が「謎」の意味をもっていた。
- (3) valh- とリトアニア語の vilbinti「魅惑する，だます」は語根 *uelh₁b^h- に由来し，ギリシア語の elephaíromai は *uélb^h-r- 「謎」の名詞起源動詞 (denominative) と考えられる。
- (4) ヘーシオドスでは「謎によって困惑させる」の意味が残っている一方で，ホメーロスではそこから派生した「欺く」の意味で使われている。

凡例

- *A A は想定形。
- *h_x 印欧祖語の喉音 (x = 1, 2, 3)。
- *u 印欧祖語の子音化した *u (サンスクリット語の v に対応)。

参考文献

Aura Jorro, F. (red.), *Diccionario Micénico* (Madrid: Consejo Superior de

書き込みには，1999年12月6日に行われたヴェルツブルクでの講演で，ある学生からそのような指摘があったことが書かれている。本解説の参考文献中に挙げられた URL から彼自身の書き込みのある論文抄録をダウンロードすることができる。

- Investigaciones Científicas, 1985–93).
- Bernabé, A., Luján, E. R., et al., *Suplemento al Diccionario Micénico* (Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas, 2020).
- Bartoněk, A., *Handbuch des mykenischen Griechisch* (Heidelberg: Winter, 2003).
- Beekes, R. S. P. (ed.), *Etymological Dictionary of Greek* (Leiden: Brill, 2010).
- Enegren, H. L., ‘Animals and Men at Knossos—the Linear B Evidence’, in B. S. Frizell (ed.), *Pecus. Man and Animal in Antiquity: Proceedings of the Conference at the Swedish Institute in Rome, September 9–12, 2002* (Rome: The Swedish Institute in Rome, 2002), 12–19.
- Gotō, T., ‘Griechisch ἐλεφαίρομαι’, in W. Smoczyński (ed.), *Analecta Indo-europaea Cracoviensia*, ii: *Kuryłowicz Memorial Volume, Part One* (Cracow: Universitas, 1995), 365–370. <http://gototoshifumi.jimdo.com>
- Heubeck, A., West, S., and Hainsworth, J. B. (eds), *A Commentary on Homer’s Odyssey*, i: *Introduction and Books i–viii* (Oxford: Clarendon Press, 1998).
- Hooker, J. T., *Linear B: An Introduction* (London: Bristol, 1980).
- 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』(岩波書店, 1960).
- 後藤敏文「Veda 祭式の brahmodya と Saṃyutta-Nikāya I 1,2,3」『印度學佛教學研究』第43卷(1994), 486–481.
- 廣川洋一(訳)『ヘシオドス 神統記』(岩波文庫, 1984).
- 松平千秋(訳)『ホメロス イリアス』(岩波文庫, 1992).
- (訳)『ホメロス オデュッセイア』(岩波文庫, 1994).

